

第2節 研究業績

1.果樹品種の見本栽培

(明治36～昭和30年)

明治36年農商務省農事試験場四国支場から譲り受けたミカン、ナシ、リンゴ、モモ、イチヂク、ビワなどを継続栽培したが、その目的は「当業者ノ参考ニ資シ、併セテ樹姿・樹型等ヲ実見センメ……」正しい品種や系統を衆知させることにあった。その後、ブドウ、ヤマモモ、スグリ、オウトウなどの新しい樹種を導入する一方、新品種を蒐集し接穂を希望者に分譲し優良品種の普及に貢献した。この見本栽培は昭和29年まで続いた。主要果樹の品種は次のとおりである。

- (1)ミカン類:亀井早生,鈴木早生,松本早生,宮川早生,井関早生,大村早生,末岡早生,大長早生,尾崎早生,普通温川,八朔柑
- (2)カキ:富有次郎,藤原御所,紅魁,祇園坊,平核無,会津不知身,四溝横野,善之助,大和,西條,蜂屋,愛宕坊,松尾,舎谷柿,精道盤柿,慶山盤柿,衣紋,帝,ゴマジリ,ワリマツオ
- (3)ナシ:菊水,新高,青龍,松島,二十世紀,八雲,祇園,王翠,相模,慈梨,鴨梨,足柄 (4)モモ:興津,大久保,普通金桃,早生,早生金桃,中山金桃,大和水密,白桃,タイカン,シムス,オレンジクリング,フクリップス,ジュンエルバータ,クエタ,フレミングゴールド
- (5)ブドウ:キャンベルスアーリー(大粒系),甲州三尺,カワラフレッシュ,シャストベーター,キャプチベーター,紅河内,魁デラ(美宝),シャスラーローズ,バレストイン,バンナーヘッドライト,デラウェア
- (6)ウメ:青玉,鶯宿,林州,玉梅,
- (7)ビワ:津雲,266号,2522号,支那早生批把
- (8)イチヂク:柘井ドーフィン,ブラウンターキ

その他 クリ:支那栗(傍系系大粒),アンズ:7品種,ヤマモモ(近藤)などである。なお,明治41～42年には果樹品種の見本を兼ねて盆栽果樹を試作し参考に供している。

2.ミカン

- (1) 改良法の実証試験(大正7～10年)

勝浦郡棚野村,阿波郡大俣村において温州ミカンおよびネーブルオレンジを栽植し,改良法(剪定・施肥,病虫害防除を指定)と,在来区との比較を現地で実証した。更に11年からは,勝浦郡高銚村,同棚野村,同生比奈村,同多家良村においても同様の試験を行い一般栽培農家に改良法の有利性を実証展示した。

- (2) 隔年結果矯正試験(昭和3～6年)

勝浦郡横瀬町において剪定および施肥法によって隔年結果を矯正する試験を4区に分けて行った。3か年の収量調査の結果,剪定+施肥区(1反あたり窒素5貫,リン酸4貫,カリ7貫),ついで3要素施肥区が収量が多くしかも良品が生産された。

- (3) 果実の生育に関する調査(昭和5年)

勝浦郡横瀬町および生比奈村において果実の横径および縦径を6月30～12月8日までの間5～6回調査を行い発育増加量を調査した。横および縦径とも最も発育の盛んであったのは7月でありついで8月～9月であった。

- (4) カラタチ苗の地下部と地上部の生育(昭和6～7年)

ガラス箱の中にカラタチおよびユズ苗を栽植し,ガラス面に現われた根の伸長状態と地上部の生育状況を4月上旬～10月上旬まで調査観察した。カラタチの地上部伸長は4月下旬～5月上旬および8月上旬～同中旬の2回ピークがみられたが,ユズの地上部伸長は5月上旬～同下旬と7月下旬および8月下旬～9月上旬の3回ピークがみられた。これに対し地下部はカラタチが6月上旬～中旬,ユズは6月中～下旬と8月下旬の2回根の伸長ピークが観察された。

- (5) 肥料試験(大正14～昭和2年)

勝浦郡横瀬町,同郡生比奈村において配合肥料の施用が,生育および収量に及ぼす影響を調査している。鰯粕,骨粉,大豆粕,蛹粕,棉実粕,米糠,硫酸アンモニア,過リン酸石灰,硫酸カリ,石灰などを各種配合して9区を設けて試験を行っている。その結果は試験場所や年次によって収量や品質に差があり判然として結果が得られなかった。

- (6) 石灰施用試験(昭和3～6年)

勝浦郡生比奈村および横瀬町において石灰の適量施用を知るために,1反あたり30～150貫を6区に分けて試験を行った。

4年間の結果,顕著な差は現われなかったが,概略石灰を1反あたり30貫内外の施肥が適当であった。幼樹での多量施用はかえって果実の品質が悪くなった。

3.力キ

- (1) 模範栽培

大正3年から10年までの間,つぎのように現地実証試験を行っている。

項目 栽培地	面積	本数	品種
海部郡赤河内村 (現 日和佐町)	1.0反	142	富有, 蜂屋, 富士, 衣紋
三好郡三名村 (現 山城町)	0.3	24	富有, 蜂屋

何れも生育は良好で模範的な実証園であり地域への展示効果が高かった。

- (2) 果実の発育調査(昭和6年)

富有と次郎を対象に6月上旬～11月中旬までの間17回果実の横断面積と縦断面積を計測し,10日間における発育増加面積を調べた。両品種とも横断面積の増加の多いのは6月中旬～8月上旬および9月下旬～10月上旬の2回あり,縦断面では6月上旬～7月中旬および9月下旬～10月上旬の2つピークが観察された。

- (3) 栽培試験(昭和4年・同10年)

実生苗移植時のペーパーマルチの効果を検討している。マルソイドルーピングによるマルチは枯死率も小さく生育も良好であったが,アスファルトは効果が認められなかった。また,昭和10年には植付後の処理方法として覆土,石灰乳塗沫,パラフィン塗沫,ワラ被覆などを設置して試験を行った。新梢の発育,幹の肥大などを1か年後に調査の結果,稲ワラ被覆(苗の先端3芽を残しそれ以下をワラで覆う)が作業の容易性などから実用的であると結論した。

4.ナシ

- (1) 品種比較

ナシの有望品種を収集して本県における適品種を選定するため,昭和4年から二十世紀,石井早生,新高,八雲,相模祇園,王翠,および菊水を板野郡大津村(現鳴門市),同川内村(現徳島市)において長十郎に高接し委託試験を行った。早生種の品質調査は昭和12年まで実施した。

その結果,早生種では八雲,石井早生,中生種では二十世紀が適品種であることを認めた。なお,同時に品種比較のため接木した品種は上記のほか博多青,山東,青龍,松島,慈梨,鴨梨,ボーレデツファー,ブレイコース,パートレット,ラフランス,ホワイトドクイアンヌ,ポーレクレルジョー,パスクラッサン およびウインターネリスなどであったが接木3年後には有望と認め難かったので試験を中止した。

- (2) 品種改良

早生および中生の優良品種を育成するために,昭和8年から13年までに八雲および菊水の自然交配,ならびに八雲と菊水の1代雑種を育成し,本場の果樹園 および委託試験地(板野郡大津村,喜瀬千代一氏)において栽培調査を行った。委託試験は都合により昭和20年で調査を打ち切り,その後は本場において試験を継続した。育成系統総数は567種に達したが,昭和20年までに8系統に選抜し,さらに21年からは8系統について調査を行った。その系統番号は30号,31号,39号,46号,64号,66号,87号,141号であったが中でも31号,39号,87号は特に有望と認められたので昭和28年に「桜」「富士」「真珠」とそれぞれ命名し公表した。これら新品種の中でも「真珠」は,八雲より樹勢が旺盛なことから,一部で試作されたが,品質的に劣ることなどから一般には普及しなかった。

- (3) 果実の発育調査(昭和6年)

菊水,青龍を用い,果実の肥大(縦径と横径)を6月中旬から9月上旬までの間10日おきに調べた。菊水では6月下～7月上旬が縦径横径とも最も発育が盛んであった。

- (4) 整枝法(昭和6～10年)

二十世紀を供試し,板野郡川内村において水平整枝,折衷整枝,盃状整枝法と生育収量との関係を調査した。5か年間のうち昭和9年度は台風の被害のため調査ができなかったが,試験開始の当初は水平整枝区が収量,果重ともに優れた。3年目からは盃状整枝区が収量,果重とも良好となった。しかし各区間の差は比較的少なかった。

- (5) 夏季剪定(昭和4～7年)

板野郡大津村において夏季の剪定時期(6月5～7月15日)および夏季の剪定方法(4芽～8芽剪定)が長十郎の果実肥大にどのように影響するかを試験した。副梢の発生量,花芽分化状況,収量などを調査した結果,剪定時期や方法が発育状況や収量に一定の影響を及ぼすことはなく,隔年結果の影響が大きいように考えられた。

- (6) 肥料試験(大正14～昭和2年)

配合肥料5区を設け生育,収量,品質に及ぼす影響を知るため,板野郡大津村の長十郎を用いて試験した。堆肥,大豆粕,鰯粕,過リン酸石灰,木灰などを用い,1aあたり窒素4.6～5.7kg,リン酸5.4～6.2kg,カリ5.5～6.3kgの施用区が多収傾向であった。

- (7) 青梨の色沢に及ぼすボルドー液の影響(昭和9～12年)

菊水,二十世紀の第1回袋掛けまでの間にボルドー液の調合法が果実の外観に及ぼす影響を知るために6区を設け,板野郡川内村で散布試験を行った。外観が良好であったのは石灰300～400匁4斗式ボルドー液の5回散布区であることを確認した。

- (8) 袋掛(昭和8年)

二十世紀ナシを供試し袋の種類および袋掛の時期が,果面や色沢にどのように関係するかを知るため,5区に分ち板野郡川内村で試験を行った。その結果,作業度および品質への影響を考慮し実際の栽培にあたっては,5月18日にパラヒン紙袋を,7月17日以降は新聞紙袋区が品質が最も良好であった。

5.ク リ

芽接の適期を知るため,昭和10年3月に播種したヤマグリを台木とし,山口早生を9月上旬～10月上旬の間4回接木した。その結果春まき台木の生育が接木に適し難い面もあったが,早い時期(9月6日)は活着率は高いが,9月下旬以降は樹皮が硬化して接木し難くなり活着率も低下した。

6.ビロ

模範栽培として大正7年～10年,板野郡大山村(現上板町)において茂木を5畝歩に栽植しその後の生育を調査している。また,苗の育成をする場合の播種間隔と種子の大きさの試験を行った。

文 献

1.押方克己(1902)本県の農事について,徳島県農会報,第2号。

2.徳島県史 第5巻(1966)